

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23510325

研究課題名(和文)ノモンハン事件をめぐる中ソ、中モ関係についての研究

研究課題名(英文)A Study of the Nomonhan Incident and its Relationship to Sino - Soviet and Sino - Mongolian Relations

研究代表者

ボルジギン 呼斯勒(BORJIGIN, Husele)

昭和女子大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：40600193

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現地調査と文献研究の両面からハルハ河・ノモンハン戦争(ノモンハン事件)をめぐる中ソ、中モ交渉の真相を考証することを目的とした。モンゴル、ロシア、台湾、中国、日本の諸公文書館、図書館に所蔵されている、これまで使われてこなかった諸史料や聞き取り調査で得られた成果に基づき、中国政府がソ連・モンゴル連合軍のノモンハンでの対日本・満洲国軍との戦いを拡大させるため、いかにソ連、外モンゴル政府を説得したか、いかにアメリカ、ドイツ、イギリス政府に働きかけたかについて検討するとともに、同戦争における中国の対ソ、対日諜報活動や、当時のドイツ政府の同戦争に対する立場とその対応などを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study concerns itself with the Battle of Khalkhin Gol - Nomonhan and is a textual critique, using field survey and literature research methods, of the diplomatic efforts launched by China towards the Soviet Union and Mongolia before and after the battle. The first-hand documents we obtained are from the various archives and libraries of Mongolia, Russia, Taiwan, China, and Japan, and these materials have never been used by others. Through these materials and through information obtained through interview surveys, we will try to illuminate how the Chinese Government lobbied the Soviet Union and Mongolian governments, how they negotiated with The United States and Germany, and their intelligence collecting activities aimed at making the Soviet - Mongolian coalition expand their combat activities to the Japan-Manchu coalition in Nomonhan. The position of the German government and the action it took regarding the Battle of Nomonhan will also be revealed through this paper.

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：ノモンハン ハルハ河 モンゴル 中国 ロシア 国際関係 満洲国 国際情報交流

1. 研究開始当初の背景

ハルハ河・ノモンハン戦争はこれまで、第2次世界大戦前夜、モンゴルと満洲国の国境沿いのハルハ河で、日本・満洲国連合軍とソ連・モンゴル連合軍が衝突した、単なる「国境紛争」と定義されてきた。同事件をめぐる国際情勢の研究においても、日ソ関係、ないし日本、ソ連、ドイツの3国関係の枠組みでのみ捉えられてきた。しかし、「国境」というあらたな政治的な境界によって分断された同じルーツをもつ人々が生活する地域で展開された「国境紛争」について、モンゴル人の視座からあらためて問い直す必要があると思われる。

一方、ハルハ河・ノモンハン戦争をめぐって、当時の中華民国政府は、ソ連のみならず、イギリス、アメリカ、外モンゴルとも秘密に交渉した。にもかかわらず、これらのことはこれまでほとんど知られていなかったし、ハルハ河・ノモンハン戦争に関する研究においてもまったく注目されてこなかった。また、現在、中国、モンゴル国、ロシアの国境は、ハルハ河・ノモンハン戦争終結後、日ソ停戦協定に定められた国境線に基づいたものだが、当時の国境線の策定をめぐる日ソ交渉において、モンゴル人民共和国の意見が反映されたかどうかについて、これまでの研究では、まったく検討されてこなかった。

2. 研究の目的

本プロジェクトは、従来、日本の研究者には利用しえなかったモンゴル語、ロシア語、中国語の資料に直接もついで、ハルハ河・ノモンハン戦争に対する中華民国政府の対応、及び同事件をめぐる中ソ、中モ交渉の真相を明らかにすることを目的とした。また、ソ連の対日本戦略、対ドイツ戦略において、モンゴルと中国は、どのように位置付けられていたのか、それは、ハルハ河・ノモンハン戦争にどのように反映されたのかについて、いかにすれば、ノモンハン事件をめぐる北東アジア社会の力関係の原点についても検討した。さらに、同戦争が北東アジア地域史に占める位置、およびその帰結を体系的に分析し、それが後の世界秩序の形成に及ぼした影響をも検証した。

3. 研究の方法

(1) モンゴル国、日本、ロシア、中国、台湾の諸公文書館のアーカイヴズを精査し、これらのオリジナル史料をつきあわせることによって、公式的イデオロギーのフィルターをとりはずし、研究対象に客観的なアプローチをする。

(2) 同分野における日本、モンゴル国、ロシア、中国の研究者と十分な意見交換をしたうえで、ハルハ河・ノモンハン戦争を基軸に据え、上記の資料に基づいて、これまでの研究ではまったく注目されてこなかった、同戦争をめぐる中ソ、中モ交渉の真相を明らかに

し、北東アジア地域における諸関係国の力関係、地政学特徴を浮かび上がらせ、現代中ソ、中モ関係史を再構築する。

(3) ハルハ河・ノモンハン戦争をめぐって、中華民国の情報部門はどのように対日、対ソ諜報活動をおこなったか、それは蒋介石の外交戦略にどのように影響したかを考察する。同時に、日本側は、当時どのようにソ連・モンゴル軍に関する情報を収集したのか、その情報は正確であったか否か、そして日本軍はどのようにそれらの情報の真偽を判断し、どのように対応したかについても分析する。すなわち、情報戦の側面から、ハルハ河・ノモンハン戦争をめぐる多国関係を検証する。

(4) 現地で国際シンポジウムとワークショップをおこなうことを通して、研究成果を広く社会に発信する。日本語、モンゴル語、中国語で論文を執筆し、日本、モンゴル国等の国の学会誌に掲載するほか、論文集も出版する。

4. 研究成果

(1) ハルハ河・ノモンハン戦争は表面上は、ハルハ河流域における日本・満洲国とソ連・モンゴル人民共和国の軍事衝突であるが、その背後には極東地域における権益をめぐる多国間の複雑な力関係があった。本研究では、同戦争をめぐる、当時の中華民国政府の、ソ連、イギリス、ドイツ、アメリカとの交渉の状況を知ることができた。1939年、中華民国政府は軍事支援をもとめただけでなく、ソ連・モンゴル連合軍のノモンハンでの日本軍との戦いを拡大させるため、懸命にソ連政府を説得した。中華民国政府はまた、ソ連がイギリス、フランスと同盟をむすび、力をあわせて、日本と戦うことを望んで、ソ連政府に働きかけた。

(2) 日中戦争勃発後の1937年8月、中華民国政府の「代表者」が外モンゴル領に入り、援助を求めたが、モンゴル国政府に拒否された。1939年のハルハ河・ノモンハン戦争当時、中華職業教育社、中国労働学社、国際反侵略運動大会中国分会などの組織も外モンゴル側に電報を送り、物質の支援も提供する等と表明したが、モンゴル国政府は中国側の呼びかけに応じなかった。

(3) ハルハ河・ノモンハン戦争をめぐって、中国の情報部門は日本政府と関東軍の多くの情報を正確に収集できたこと、日本の情報機関の防諜工作にはおおきな問題があったことを明らかにした。他方、ソ連との友好関係により、中華民国政府はソ連の中国大使館、領事館、および関係諸国にある中国の大使館から、すなわち外交ルートでソ連の情報をえることができた。

(4) ハルハ河・ノモンハン戦争の時、モンゴル軍に拘束された153名の日本軍捕虜の状況と、ソ連から中国国民党政権に引き渡された満洲国軍の36名の捕虜の行方が判明した。

(5) 中国政府はハルハ河・ノモンハン戦争停戦後の日ソ交渉の進展に終始注目し、情報を収集したほか、どのように対応するか政府内部でも議論した。「日ソ中立条約」締結後、蒋介石は、日本がソ連とこの条約を結んだのは、将来生じ得る独ソ衝突の際に、ドイツを援助する義務から日本が逃避するものであると認識した。同条約の締結に対する中国政府側の分析は、的を射ていたことと、国境線の策定をめぐる日ソ交渉において、モンゴル人民共和国の意見が反映されなかったことも指摘した。

(6) 研究代表者は、モンゴルと台湾でおこなった国際シンポジウムで、研究成果を報告したほか、2011年9月に東京で国際シンポジウム「ノモンハン（ハルハ河）戦争と国際関係」を、2012年11月にウランバートルで国際シンポジウム「ハルハ河（ノモンハン）戦争の歴史：新資料と新研究」をそれぞれ企画・開催し、日本、モンゴル、ロシア、台湾等の国の研究者が計16本の論文を発表した。その内の12本を選び、論文集『ハルハ河・ノモンハン戦争と国際関係』（三元社、2013年）として出版し、国際的に大きな注目をあつめた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① ボルジギン・フスレ、ハルハ河・ノモンハン戦争における日本軍捕虜についての基礎的研究——モンゴルで発見された日本軍捕虜の資料を中心、学苑、査読有、第876号、2013、43-60
- ② ボルジギン・フスレ、ハルハ河・ノモンハン戦争をいきた人たち——インタビュー記録（1）、日本とモンゴル、査読無、第48巻第1号、2013、83-90
- ③ ボルジギン・フスレ、ハルハ河・ノモンハン戦争における中国の対日、対ソ諜報活動、学苑、査読有、第874号、2013、23-37

〔学会発表〕（計7件）

- ① ボルジギン・フスレ、ハルハ河・ノモンハン戦争における中国の対日諜報活動、The International Symposium “The Historical Studies of the Khalkyn Gol (Nomonhan) Battle: Records and Memories of the Battle Fields”, ハルハ河戦争勝利記念博物館、Dornod, Mongolia, 16-19, September, 2013
- ② ボルジギン・フスレ、ハルハ河・ノモンハン戦争をめぐる国際関係——中ソ関係を中心に、第2回日本・モンゴル青年フォーラム「東アジアの秩序の再編における日本とモ

ンゴル」、モンゴル・日本人材開発センター、モンゴル国、2013年9月10-12日

③ ボルジギン・フスレ、ノモンハン戦争をめぐる中ソ交渉の新資料と研究の新成果、The International Symposium “New Findings and Research Achievements on the Khalkyn Gol (Nomonkhan) Battle” (国際シンポジウム「ハルハ河[ノモンハン]戦争の歴史：新資料と新研究」), Defense University of Mongolia, Ulaanbaatar, Mongolia, 7, November, 2012

④ G. ミヤグマルサムボー (G. Myagmarsambuu)、ハルハ河戦争とフルンボイルのバルガ族、The International Symposium “New Findings and Research Achievements on the Khalkyn Gol (Nomonkhan) Battle” (国際シンポジウム「ハルハ河[ノモンハン]戦争の歴史：新資料と新研究」), Defense University of Mongolia, Ulaanbaatar, Mongolia, 7, November, 2012

⑤ S. ウルズィードウーレン (S. Ulziiduuren)、ロシア連邦におけるハルハ河戦争史研究とその成果および今後の動向（2000年以降）、The International Symposium “New Findings and Research Achievements on the Khalkyn Gol (Nomonkhan) Battle” (国際シンポジウム「ハルハ河[ノモンハン]戦争の歴史：新資料と新研究」), Defense University of Mongolia, Ulaanbaatar, Mongolia, 7, November, 2012

⑥ ボルジギン・フスレ、諾門罕戦争与中蘇関係、The International Symposium “Russia in Eastern Asia: the dialogue between Taiwanese, Japanese and Russian scholars”, National Chengchi university, Taipei, 26, November, 2011

⑦ ボルジギン・フスレ、ノモンハン戦争をめぐる中ソ交渉、国際シンポジウム「ノモンハン（ハルハ河）戦争と国際関係」、一橋大学、2011年9月25日

⑧ G. ミヤグマルサムボー (G. Myagmarsambuu)、ハルハ河戦争に参加したモンゴル人民革命軍について、国際シンポジウム「ノモンハン（ハルハ河）戦争と国際関係」、一橋大学、2011年9月25日

〔図書〕（計1件）

① 田中克彦、ボルジギン・フスレ編、ハルハ河・ノモンハン戦争と国際関係、三元社、2013、155 (pp. 29-56, 153-155)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ボルジギン 呼斯勒 (Husel BORJIGIN)

昭和女子大学・人間文化学部・准教授
研究者番号：40600193

(2)研究分担者：なし

(3)連携研究者：なし

(4)研究協力者

G. ミヤグマルサムボー (G. Myagmarsambuu)
モンゴル防衛研究所・教授

S. ウルズィードゥーレン (S. Ulziiduuren)
モンゴル軍博物館研究員